

【原著論文】 親密確認活動におけるおそろい行動  
—被異質視不安と自尊感情との関連—

山 田 有 莉

金城学院大学大学院人間生活学研究科博士課程前期課程

The behavior of *osoroi* in confirming close relationships:  
In relation to self-esteem and anxiety over being regarded as different

Yuri Yamada

Graduate School of Human Ecology, Kinjo Gakuin University

This study examined the relation of the anxieties of adolescents over being regarded as different from others and their tendency toward uniformity in their friendship groups with self-esteem and the behavior of *osoroi*. *Osoroi* refers to friends who have matching clothes and stationary or another accessory or item. The subjects were university freshman at a private women's college (N = 286). The major findings were follows. (1) Anxiety over being regarded as different was found to be related to self-esteem. (2) Self-esteem was associated with anxiety over being regarded as different and the feeling of *osoroi*. The results show that the tendency toward uniformity in friendship groups affect friendships differently.

Keywords : Anxiety about being regarded as different (被異質視不安),  
tendency to uniformity in friendship groups (異質拒否傾向), self-esteem (自尊感情)

要 約

本研究は青年期女子の友人関係における被異質視不安・異質拒否傾向、自尊感情と「おそろい行動」の関連を明らかにすることを目的とし研究を行った。ここで指す「おそろい」とは、洋服や文具などを友人間で合わせることを意味する。私立女子大学1年生286名(M=18.4, SD=.75)を対象に質問紙調査を行った。その結果、(1) 自尊感情が高いほど被異質視不安は低くなり、(2) 被異質視不安が高いほど「おそろい行動」に対して肯定的な感情を持つことが明らかになった。また青年期女子の友人関係において被異質視不安と異質拒否傾向は異なって影響していることが推測された。

## I. はじめに

現代ではネットの普及によりTwitter, LINE, Face book等のSNSを気軽に使用し自己表現できるようになった。これらの自己表現をより他者から好感の持たれる写真とし、それを投稿できる様々な無料カメラアプリ、写真の取り方を解説した記事が多くある。その中で「双子コーデ」「おそろ」に関する記事がある。「双子コーデ」は最近の若者におけるファッションの一つであり、新しい流行スタイルであるため学術的な定義や研究を見つけることは困難である。しかし社会事情の言葉を掲載しているコトバンクというウェブサイトでは、双子コーデを「数人が服・靴・髪型など全体的なファッションを揃えること。主に親しい友人関係の若い女性2人が、双子のように揃えてファッション・コーディネートすることを指す」としている。双子コーデについて個人的に記事を掲載できるサイト（NAVERまとめ）では多くの記事が載せられており、テレビ番組でも特集されている（“双子コーデ女子”急増のハテナ?!、ZIP・Kwii Twin Style, Kwii International）。同様の現象として恋人間でみられる「ペアルック」があるだろう。しかしこの「双子コーデ」「おそろ」とは、主に同性の友人間でみられるものである。近年では上述のように服装を合わせて友人と撮った写真をSNSに投稿しているものが多く見受けられる。このように友人と服装や持ち物をあわせる行動（以下、おそろい行動とする）が友人関係に影響しているのではないかと考え、おそろい行動と青年期女子における友人関係の関連について検討する。

### 1. 青年期の友人関係におけるあり方

思春期はchum-group（保坂・岡村, 1986）のように同質性を重視する関係性からpeer-group（保坂・岡村, 1986）のように異質性を認め合う関係性へと変化していく時期である。保坂（1998）は、chum-groupとは中学生（思春期前半）でみられる仲良しグループをさすとしている。このグループでは互いの共通点、類似点を言葉で確かめ合い、その言葉が通じる者のみが仲間であるとしたうえでどちらかといえば女子に特徴的にみられると述べている。これ

は女子中高生が「自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしている」という報告からも支持される（保坂, 1993）。その一方でpeer-groupとは高校生（思春期後半）でみられる、共通点、類似点だけでなく互いの異質性をぶつけ合うことによって他者との違いを明らかにし、自立した個人として尊重しあって共にいることのできる状態のグループをさす（保坂, 1998）。また榎本（2003）は、青年期における仲間は青年が親の情緒的な依存から独立し自我の自律性を獲得する過程において援助的拠点になっているとしている。これらのことから、友人関係が青年期における適応に影響していると考えられる。

先行研究では、青年期の女子が集団のなかで特定の仲良しグループを作りがちなことが指摘されている（永沢, 1969；佐藤・落合, 1993）。グループ成員について佐藤・落合（1993）は、女子の友人関係の特徴として、2人よりも、もっと多人数のグループとする捉え方が優勢であるとしている。さらに佐藤（1995）は、この多人数のグループは複数の下位グループの連合によって成立しているとしている。また同論文の中で高校生女子がグループに所属する理由について「複数の友人によって支えられていること」「浮いた存在になりたくないこと」をあげ、「浮いた存在になりたくない」という理由は、高校生女子が閉鎖的なグループを志向する傾向と関連があると述べている（佐藤, 1995）。これらは、後述の高坂（2010）の被異質視不安・異質拒否傾向に関する研究からも支持される。

青年期女子のなかでも、まず本研究では大学生女子における友人関係について検討したい。また先行研究（永沢, 1969；佐藤・落合, 1993）にもあるように、青年期女子の友人関係が多人数のグループで構成されていることが指摘されている。そのため本研究では、おそろいに関する項目で「あなたの親しい友人（親友でなくてもよい）」という教示文を用いて検討した。

### 2. 被異質視不安と異質拒否傾向

榎本（2003）は、青年期の友人関係における活動のあり方として「相互理解活動」、「親密確認活動」、

「共有活動」,「閉鎖的活動」の4つを挙げている。特に女子の安定的な感情のみが背景にある活動を「閉鎖的活動」とし, 中学・高校・大学を通じて他者を入れない親密な絆を友人との間で築くことで安定的な感情を得られていることを明らかにしている(榎本, 2003)。一方, 男子については安定的な感情を「共有活動」から得ており, 性差が認められると述べている。

高坂(2010)は, 青年は“異質なものを拒否する傾向(以下, 異質拒否傾向)”をもっていることが推測されるとしている。青年期における友人関係が同質性を重視した関係であることは先行研究で明らかにされている(保坂・岡村, 1996; 保坂, 1998; 榎本, 2003)。特に青年期前期においては友人関係において同質性を重視しており, そのために自分たちとは異質な友人を拒否する異質拒否傾向が生じるとしている。被異質視不安と異質拒否傾向は, 異質な者として拒否され異質な者を拒否する受動と, 異質な者を拒否する能動の関係にあるとしている(高坂, 2010)。そのため, 異質拒否傾向が被異質視不安を高めることを指摘している。また, 被異質視不安は年齢と共に徐々に低下していくことを示している。このことは, 保坂・岡村(1986)や保坂(1998)が同質性を重視するchum-groupから異質性を重視するpeer-groupに移行すると論じていることから支持される。また, 榎本(2003)でも高校生を境に同様に, 同質性から異質性を重視する関係へ変化している。さらに青年が自己の考えや関心は他者も自分と同程度に持っていると推論してしまう自己中心性のために, 異質拒否傾向が被異質視不安を生じさせているとしている(高坂, 2010)。

また榎本(2003)は友人との異質性を認める「相互理解活動」が大学生男女において認められるとしている。これは高坂(2010)においても, 男女ともに同様の結果が示された。しかし, 榎本(2003)の調査では大学生女子においてのみ友人にどう思われているかを気にする意識的な不安が関連していることが明らかになった。これを榎本(2003)は親密感がなくなったことによる不安感であるとしている。このように青年期における友人関係の変化は不安を伴うと考えられる。

### 3. 内集団における親密確認活動

被異質視不安と関連があると考えられる友人関係における特徴として, 表面的で円滑であること, 友人に対する強い同調性をもつこと, 電子メールやインターネットを用いて友人関係を切らさないように努力をしていることがあげられる。これらの特性は, 近年の友人関係の特徴として「やさしい」関係(太平, 1995; 土井, 2008)とされ議論がなされている。千石(2005)は, 現代日本の女子中高生は5人以内の内集団グループを形成し, ペルソナ的な集団であるとしている。これは, 女子高校生のグループ成員数と友人関係に関する研究でも指摘されている(佐藤・落合, 1993)。また佐藤・落合(1993)は, 女子高校生のグループは成員数の多少にかかわらず, グループの中の人と深くかかわりあう付き合い方に差がないとしている。また内集団については社会的アイデンティティ理論の視点からも議論がなされている。松崎ら(2003)は, 自己同定とは集団への同一化でありその集団のもつSI(集団アイデンティティ)に沿って自己を規定し, それを受け入れることであるとしている。渡辺(2014)は, 自己と内集団の連合が自己防衛機能を果たしているとしている。これは尾関(2011)が集団アイデンティティにおける研究で, 集団に所属することが自尊心の維持と高揚にとって非常に重要であり, ひいては個人の適応の維持につながるとしていることから支持される。したがって, 集団に所属することは社会的に意義があり, 自己の維持においても重要である。

榎本(2003)は, 「親密確認活動」のような同質性を特徴とする行動や趣味の類似性で友人関係を保つということは不安感が背景にあることを明らかにしている。これは前述した被異質視不安に加え, 青年期の集団所属が防衛的で適応的機能があることが考えられる。また益子(2008)は, 他者の承認を得ることで特に自尊心の低下を防衛していると述べている。しかしその一方で, 仲間関係で不安を感じているだけより, 仲間への親密さ・同調性への欲求や, 異質性への希求を併せ持っているほうが学校生活でより多くのストレスを感じていることが明らかにされている(黒沢, 2005)。また上野ら(1994)は, 仲間集団への同調性と心理的な密接さが必ずしも一

致していないと述べている。

この仲間集団への同調性が確認できる様式として物品の共有が挙げられる。高坂ら（2010）および池田ら（2013）では、青年期の友人関係における共有様式の研究では、さまざまな共有している対象と心理的機能関連について論じている。共有とは“一つの何かを、あるいは、同じ何かを二人以上が共にもつこと”としている（高坂ら，2010）。共有は友人関係の構築や維持，親密化にポジティブな機能を持つとしながらも，同調性圧力のようなネガティブな心理的機能も持っているとしている（高坂ら，2010）。近藤（2010）は，共有体験が基本的自尊感情を育むことを検討している。池田ら（2013）は，大学生における友人関係と共有様式について論じている。そこで池田ら（2013）は，友人関係が親密になるに伴い現れる共有様式が変化していくというよりも，共有様式が多様になっていくことが示唆されたとしている。そして「物品の共有」は，中程度の親密度であるとされる「仲のよい友達関係」では関係満足度を低減させ，「親友のように特に親密な関係」では深い付き合い方を低減させているとしている。また，「物品の共有」と「考え・感性が共通する」とは意味合いが異なるとした上で，大学生の親密な友人関係を議論するうえであまり重要でないとしている。しかし，大学生女子が内集団において視覚化できる「物品の共有」によって親密確認活動を行うことで安心感を得ているのではないかと考える。ネット上やテレビ番組では「双子コーデ」「おそろ」として同様の概念が取り上げられているものの，この概念における研究はなされていない。そのため本研究では，一人もしくは複数の友人と何らかの物品を意図的に揃えることを「おそろい行動」と定義し，大学生女子における「おそろい行動」について検討する。

#### 4. 自尊感情

個人内の適応を測定する指標として本研究では自尊感情を取り上げる。自尊感情（self-esteem）とは，人が持っている自尊心の感じ方をさし，自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚—感情—である（遠藤ら，1992）。また，ローゼンバーグは自

尊感情とは特別な対象（自己）に対する態度であると同時に他の対象（自己以外のもの）に対する態度と基本的に同じであるとしている。そして自尊感情とは自分を「非常によい（very good）」と「これでよい（good enough）」と考えることができ，自尊感情が高いということは後者の「これでよい」と感ずることを意味する。つまり「これでよい」と感じるほど自分自身に対して肯定的であり，他者と異質なものとしてみられることに不安が少ないのではないかと考える。また管（1975）の自尊感情と友人関係における研究では，対他者関係が良好なほど不良な群と比較して現在の自己を好ましいと感じる傾向にあるとし，中学生女子においては女子のほうが男子より対他者関係が良好なものは自尊感情が高いとしている。しかし中間ら（2007）は，自尊感情の高さが必ずしも良好な対人関係に繋がるとは限らないとしている。

## II. 目的

本研究では青年期女子の友人関係における被異質視不安・異質拒否傾向と自尊感情について，それらと「おそろい」行動との関連について明らかにすることを目的とする。自尊感情が被異質視不安・異質拒否傾向を媒介にして「おそろい」行動に間接的に関わっているというFigure 1に示すモデルを作成し，モデルを検証する形で，被異質視不安及び異質拒否傾向と自尊感情，「おそろい」行動との関連を検討する。なお本研究で扱う友人関係は，同性の友人に限定した。

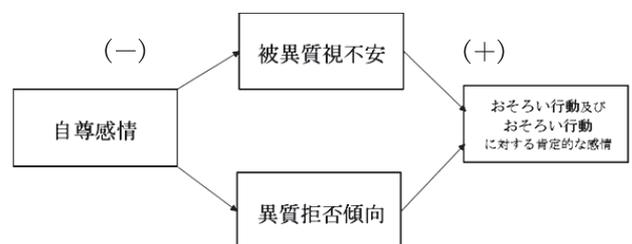


Figure1 本研究における仮説パス図

「おそろい」行動に関する項目では内集団について検討するため，親友でなくてもよい友人を想定してもらい検討した。仮説は以下の通りである。

仮説1 自尊感情が高いほど、被異質視不安は低くなる。

仮説2 被異質視不安が高いほど「おそろい」行動も高まり、自尊感情が低いほど「おそろい」行動も高まる。

### Ⅲ. 方法

#### 調査対象者

愛知県内の私立女子大学1年生286名（平均年齢18.4歳、標準偏差0.75歳）を調査対象者とした。

#### 調査内容

次の①から③に示す尺度について質問紙調査を行った。①被異質視不安・異質拒否尺度と②おそろいに関する項目、③特性自尊感情尺度で構成された質問紙を用いて調査を行った。

(1) **被異質視不安・異質拒否尺度**：高坂（2010）の被異質視不安・異質拒否傾向尺度項目22項目を使用した。「以下の項目は、あなたが親しい同性の友人と付き合うときの気持ちや考えにどの程度当てはまりますか」という教示のもと、1「全く当てはまらない」、2「あまり当てはまらない」、3「どちらともいえない」、4「やや当てはまる」、5「とても当てはまる」の5件法で回答を求めた。

(2) **おそろいに関する項目**：おそろい行動とおそろいに対する感情についての質問を設けた。

① **おそろい行動に関する項目** まず「おそろい」行動を日常、部活・サークル、旅行場面の3場面を設定した。「以下の質問に、あなたの親しい友人（親友でなくてもよい）を想定して回答してください。」という教示のもと、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。部活・サークル場面に関しては、部活・サークルに所属している人だけに回答を求めた。また、自由記述欄を設け、「その他にそろえているものがあれば記入して下さい。」という教示のもと自由回答を求めた。教示の隣には記入例を載せた。

② **おそろい感情についての項目** 「おそろい」行動に対する感情について尋ねる項目で構成された尺度を作成した。「私は友人とおそろいのものを持ちたい。」や「私は友人とおそろいのものを

持つことに違和感を覚える。」といった内容で、「あなたは以下の項目についてどのように感じますか。」という教示のもと、1「当てはまらない」、2「やや当てはまらない」、3「やや当てはまる」、4「当てはまる」の4件法で回答を求めた。

(3) **特性自尊感情尺度**：山本・松井・山城（1982）の訳による、Rosemberg（1985）の特性自尊感情尺度10項目を使用した。「以下の項目に、あなたはどの程度当てはまりますか。」という教示のもと、1「当てはまらない」、2「やや当てはまらない」、3「どちらともいえない」、4「やや当てはまる」、5「当てはまる」の5件法で回答を求めた。

#### 調査時期

2015年6月に調査を実施した。

#### 実施手続き及び倫理的配慮

調査は、講義時間の一部を使って、著者が集団で実施した。いずれの場合も、無記名であり、その場で回収した。また、調査への協力は任意であること、回答を拒否できることや回答を中断できることなどを紙面に明記し、口頭でも伝えた。

### Ⅳ. 結果

#### 1. 被異質視不安・異質拒否傾向尺度の検討

被異質視不安項目・異質拒否傾向項目あわせて22項目について、主因子法・promax回転による因子分析を行った（Table 1）。その結果、この結果は、高坂（2010）とほぼ同様の2因子構造であった。したがって高坂（2010）と同様に第一因子を「被異質視不安」（ $\alpha = .88$ ）、第二因子を「異質拒否傾向」（ $\alpha = .87$ ）とした。各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ、「被異質視不安」が.88、「異質拒否傾向」が.87と、十分な内的一貫性が確認された。各因子の項目の平均を算出し、それぞれ「被異質視不安」得点、「異質拒否傾向」得点とした。なお、尺度得点は得点が高いほど被異質視不安性、異質拒否性が高いことを意味する。

Table1 被異質視不安・異質拒否傾向項目の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

項目	F1	F2
第一因子（被異質視不安） $\alpha=.88$		
2-6：できるだけ友だちと同じであろうと気を使っている	.78	-.08
2-7：友だちと一緒にいないと不安になる	.77	-.10
2-10：友だちから取り残されないように気を使っている	.76	-.04
2-5：友だちに合わせなければならないと思う	.73	-.11
2-9：友だちと違う意見を言うのが怖い	.65	-.07
2-16：自分は友だちと同じかどうか気になる	.62	.04
2-23：友だちから変わった人だと思われていないか不安になる	.61	.11
2-8：友だちと一緒にいないと不安になる	.57	-.14
2-3：友だちから浮いているように見られたくない	.51	.07
2-20：友だちの前で目立つことはしたくない	.48	.22
第二因子（異質拒否傾向） $\alpha=.87$		
2-18：話題が合わない友だちとは話したくない	.06	.78
2-19：自分とは意見が違う友だちとは関わりたくない	.08	.77
2-12：自分の考えとは合わない友だちとはつきあいたくない	-.06	.71
2-22：意見があわない友だちとの関わりは避ける	.01	.69
2-24：自分とは同じ価値観の友だちとだけつきあいたい	-.01	.63
2-15：自分とは違う考えを持っている友だちとはつきあいたくない	.04	.63
2-11：趣味や関心が違う友だちとは仲良くなろうとしない	-.03	.61
2-14共通の話題がある友だちとだけ話したい	.10	.59
2-21：自分と同じ考えを持っている友だちだけがいたらよいと思う	.05	.55
2-4：気があわない友だちとは一緒にいたくない	-.08	.43
2-2：気があわないと関わりたくない	-.09	.41
2-1：気があわない友だちからの誘いはどんなことでも断る	-.17	.38
因子相関	.25	

## 2. 特性自尊感情尺度の検討

自尊感情項目10項目について、逆転項目の回答を逆転処理して、10項目の $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha = .78$ と十分な内的一貫性が確認された。そこで、10項目の平均を算出し、自尊感情得点とした（Table 2）。尺度得点は得点が高いほど自尊感情性が高いことを意味する。

Table2 自尊感情項目

1：少なくとも人並みには、価値のある人間である	
2：色々な良い要素をもっている	
3：敗北者だと思ふことがある (R)	
4：物事を人並みには、うまくやれる	
5：自分には、自慢できるところがあまりない (R)	
6：自分に対して肯定的である	
7：だいたいにおいて、自分に満足している	
8：もっと自分自身を尊敬できるようになりたい (R)	
9：自分は全くだめな人間だと思ふことがある (R)	
10：何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ (R)	
10項目についての $\alpha$ 係数	.78

注：(R)は逆転項目である

## 3. おそろい項目に関する検討

おそろい行動の生じる3場面とお揃い感情の信頼性係数について検討した。おそろい（日常場面）では、 $\alpha = .54$ 、おそろい（部活場面）では $\alpha = .24$ 、おそろい（旅行場面）では $\alpha = .44$ と十分な内的一貫性は確認されなかった。またおそろい（感情）では $\alpha = .63$ と内的一貫性は十分な高さが得られなかったが、おそろい（感情）得点とした（Table3）。

おそろい行動の生じる3場面においてのおそろい行動の有無について以下に示す（Table4～6）。なお、おそろい（部活・サークル場面）では部活・サークルに所属していると回答した者のみを対象とした。

Table3 おそろい（感情）項目

1. 私は自分だけ友人とそろえたものを持っていなくても平気だ	
2. 私は友人からそろいのものをもらえると嬉しい	
3. 私は友人とそろいのものを持つことに違和感をおぼえる	
4. 私は友人とそろいのものをもちたい	
4項目についての $\alpha$ 係数	.63

Table4 おそろい行動の度数分布（日常場面）

	はい（人/%）	いいえ（人/%）
1. 私はSNSのアイコンを友人とそろえている（Twitter, LINEなど）	23（9%）	263（91%）
2. 私は文具を友人とそろえている	10（4%）	276（96%）
3. 私は小物を友人とそろえている（キーホルダー, ストラップなど）	47（20%）	239（80%）
4. 私はファッションを友人とそろえている	13（5%）	273（95%）

Table5 おそろい行動の度数分布（部活・サークル場面）

	はい（人/%）	いいえ（人/%）
1. 私は個人で使用する靴などの用具をそろえている	58（43%）	134（47%）
2. 私はSNSのアイコンを友人とそろえている（Twitter, LINEなど）	4（2%）	188（98%）
3. 私は小物を友人とそろえている（キーホルダー, ストラップなど）	5（3%）	187（97%）
4. 私はファッションを友人とそろえている	4（2%）	189（98%）

Table6 おそろい行動の度数分布（旅行場面）

	はい（人/%）	いいえ（人/%）
1. 私は小物を友人とそろえている（キーホルダー, ストラップなど）	87（44%）	198（56%）
2. 私はファッションを友人とそろえている	104（57%）	181（43%）

また、おそろい行動について具体的例を探索するために、おそろい3場面で提示した以外に「その他にそろえているものがあれば記入してください。」という教示のもと自由記述形式で回答を求めた。また教示文の隣には「隣の席の子と自転車をそろえている」という例を記載した。284人中36人から回答が得られた。次に回答に記載されているおそろいにして物に以下の5つに分類した。「ファッション」（洋服、靴など）、「小物」（ストラップ、ポーチなど）、「アクセサリ」（ピアス、ネックレスなど）、「モバイル」（スマホケース、アイコン、ホーム画面など）、「文具」（手帳、ペンなど）、その他に分類した。これをTable 7に示す。

#### 4. 尺度間の因子相関

次に、各変数の記述統計と相関をTable 8に示す。その結果、被異質視不安とおそろい（感情）の間に1%水準で弱い正の相関が、被異質視不安と自尊感情の間に1%水準で弱い負の相関がみられた。異質拒否傾向と他の尺度との間には、相関はみられなかった。

#### 5. 異質拒否傾向の高低による各尺度のt検定

被異質視不安、おそろい（日常場面）、おそろい（部活・サークル場面）、おそろい（旅行場面）、自尊感情

それぞれについて、異質拒否傾向得点の高低に分類し、平均値の差の検定を行った。まず異質拒否傾向得点の平均値（ $M=2.46$ ）により、高群（125名）・低群（143名）に分けた。高群および低群の被異質視不安、おそろい（日常場面）、おそろい（部活場面）、おそろい（旅行場面）、自尊感情の平均値および標準偏差をTable 9に示す。また異質拒否傾向の高群と低群の間で、上記の各因子を従属変数としてt検定を行った。その結果、被異質視不安と0.1%水準で有意差がみられた（ $t(278) = -3.53, p < .001$ ）。また、おそろい（感情）と10%水準で有意傾向がみられた（ $t(281) = 2.66, p < 0.1$ ）。これをTable 9に示す。

#### 6. 3場面におけるおそろい行動の有無に関する検討

各場面におけるおそろい行動の有無によって「おそろい行動あり群」と「おそろい行動なし群」に分類した。そして被異質視不安、異質拒否傾向、おそろい（感情）、自尊感情それぞれについて、平均値の差の検定を行った。また、おそろい行動に関する項目のうち一つでもおそろいにして回答したものを「おそろい行動あり群」、ひとつもあてはまらなかったものを「おそろい行動なし群」と分類した。さらにおそろい行動（部活・サークル場面）では、部活・サークルに入っていないと回答したものは除外した。その結果をTable10からTable12に示す。

Table 7 おそろい自由記述

番号	1		2		3		分類
	誰と	何を	誰と	何を	誰と	何を	
11	友だち	リュック					ファッション
17	一緒にライブに行く友だち	洋服	よくごはんに行く友だち	ストラップ			ファッション, 小物
42	高校の友だち	ピアス	親友	ネックレス			アクセサリー
43	高校時代の友人	キーホルダー					小物
49	友人	出産の日					その他
52	友人	お土産					その他
67	友人	シュシュ	友だち	ワンピース			アクセサリー, ファッション
68	京都の親友	服	地元の友だち	ピアス	地元の友だち	ポーチ	ファッション, アクセサリー, 小物
89	友人	iphoneケース	友人	手帳			モバイル, 文具
91	友人	iphoneケース	友人	パーカー	弟	スタジャン	モバイル, ファッション
92	恋人	ラインのアイコン	恋人	キーホルダー			モバイル, 小物
94	友だち	ロッカーにはるマグネット					小物
95	金城の親友	定期いれ	高校の親友	アクセサリー	高校の親友グループ	パーカー	小物, アクセサリー, ファッション
97	金城生	服装					ファッション
100	部活の友だち	プレスレット					アクセサリー
108	中学から仲がいい子	アクセサリー					アクセサリー
121	彼氏	ホーム画面					モバイル
122	彼氏	キーホルダー	彼氏	靴下			小物
123	コンサートテーマパークへ行く友だち	服					ファッション
124	高校の友だち	ネイル					アクセサリー
125	同じグループの子	ボールペン					文具
132	同じグループの子	ボールペン					文具
134	友人	リュック	幼馴染	シャープペン			ファッション, 文具
153	コンサートのときに友人	ファッション					ファッション
158	部活の子	ジャージ					ファッション
172	友人	ラインのひとこと					モバイル
178	コンサートに行く友達	ファッション					ファッション
186	旅行に行くとき友人	髪型					その他
191	親友	化粧ポーチ					小物
241	親しい友だち	アルバム					文具
244	友だち	iphoneケース					モバイル
253	地元の友だち	キーホルダー					小物
263	親友	ピアス					アクセサリー
265	地元の友だち	iphoneケース	高校の友だち	ポーチ	高校の友だち	ピアス	モバイル, 小物, アクセサリー
270	友だち	実習先					その他
275	部活の子	サングラス	部活の子	麦わら帽子			小物
284	地元の友だち	アドレス					モバイル

日常場面におけるおそろい行動の有無による比較では、被異質視不安、異質拒否傾向、自尊感情の差は見られず、おそろい（感情）について0.1%水準で「おそろい行動あり群」が「おそろい行動なし群」より

も高かった。旅行場面においても同様に、被異質視不安、異質拒否傾向、自尊感情の差は見られず、おそろい（感情）について0.1%水準で「おそろい行動あり群」が「おそろい行動なし群」よりも高かつ

Table8 各変数の記述統計量と相関

	平均	標準偏差	1	2	3
1 被異質視不安	2.53	.72			
2 異質拒否傾向	2.36	.6	.19**		
3 おそろい(感情)	2.89	.55	.30**	-.15	
4 自尊感情	2.92	.57	-.42**	-.10	-.08

\*\* $p < .01$ 

Table9 異質拒否傾向高群および低群の平均値

	異質拒否傾向高低	<i>n</i>	平均	標準偏差	<i>t</i> 値 ( <i>df</i> )
被異質視不安	高群	140	2.38	0.69	-3.53(278)**
	低群	140	2.68	0.73	
おそろい(感情)	高群	140	2.98	0.52	2.56(281)*
	低群	143	2.81	0.57	
自尊感情	高群	139	2.99	0.56	2.19(277)
	低群	140	2.84	0.58	

\*\* $p < .001$ ,\* $p < .01$ Table10 おそろい(日常場面)行動群における *t* 検定

	おそろい行動	<i>n</i>	平均	標準偏差	<i>t</i> 値 ( <i>df</i> )
被異質視不安	あり	65	2.61	0.74	.99(280)
	なし	217	2.51	0.72	
異質拒否傾向	あり	65	2.28	0.54	-1.25(282)
	なし	219	2.38	0.61	
おそろい(感情)	あり	66	3.25	0.48	6.48(283)***
	なし	219	2.78	0.52	
自尊感情	あり	66	2.85	0.55	-1.13(279)
	なし	215	2.94	0.58	

\*\*\* $p < .001$ Table11 おそろい(部活・サークル場面)行動群における *t* 検定

	おそろい行動	<i>n</i>	平均	標準偏差	<i>t</i> 値 ( <i>df</i> )
被異質視不安	あり	61	2.65	0.72	.98 (189)
	なし	130	2.55	0.65	
異質拒否傾向	あり	62	2.35	0.63	-.08 (188)
	なし	128	2.36	0.58	
おそろい(感情)	あり	62	2.97	0.60	.72 (189)
	なし	129	2.91	0.49	
自尊感情	あり	62	2.98	0.59	.73 (189)
	なし	129	2.92	0.55	

Table12 おそろい(旅行場面)行動群における *t* 検定

	おそろい行動	<i>n</i>	平均	標準偏差	<i>t</i> 値 ( <i>df</i> )
被異質視不安	あり	138	2.59	0.73	1.34(280)
	なし	144	2.47	0.71	
異質拒否傾向	あり	140	2.32	0.57	1.06(282)
	なし	144	2.40	0.62	
おそろい(感情)	あり	141	3.07	0.53	5.76(283)***
	なし	144	2.72	0.51	
自尊感情	あり	139	2.92	0.57	.01(279)
	なし	142	2.92	0.58	

\*\*\* $p < .001$ 

Table13 記述統計

	平均	標準偏差
被異質視不安	2.53	.72
異質拒否傾向	2.36	.6
おそろい(感情)	2.89	.55
自尊感情	2.92	.57

た。しかし、おそろい(部活・サークル場面)ではどの尺度についても有意差が見られなかった。

## 7. 自尊感情, 被異質視不安, 異質拒否傾向及びおそろい(感情)における共分散構造分析

おそろい(感情)を規定する諸要因の関係を明らかにするために、仮説モデルについてパス解析を行った。まず各因子の記述統計をTable 13に示す。また解析の結果をfigure 2のパス・ダイアグラムに示す。矢印は有意なパスを示し、数値は標準偏回帰係数を示す。モデルの各適合度は  $\chi^2(3) = 9.50$ ,

$p < .05$ , CFI=.928, RMSEA=.089, IFI=.933であり、不十分な値ではあるが概ね満たすものとしてモデルに採用した。自尊感情から異質拒否傾向間にパス係数の有意差はみられなかった。しかし、自尊感情、被異質視不安、おそろい(感情)の間では有意なパス係数がみられた。また、異質拒否傾向からおそろい(感情)の間でも有意なパス係数がみられた。

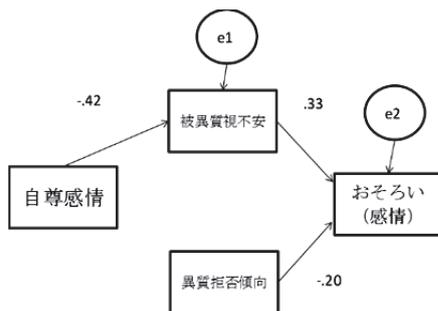


Figure2 パス解析の結果

## V. 考察

本研究では、大学生女子の友人関係における異質な存在としてみられることに対する不安（被異質視不安）について、自尊感情や青年期における「おそろい」行動との関連を検討することを目的とし、仮説に基づいて検討した。

### 1. 被異質視不安と異質拒否傾向の青年期における変化

まず被異質視不安と異質拒否傾向尺度について因子分析を行ったところ高坂（2010）と同様の結果が得られ、「被異質視不安」と「異質拒否傾向」とした。次に各尺度間の相関を検討した結果、被異質視不安はおそろい（感情）と自尊感情との間で相関がみられた。これは本研究の仮説モデル（Figure 1）を支持し、本研究の仮説1を支持する結果となった。しかし異質拒否傾向はどの因子とも相関がみられなかった。この結果より高坂（2010）は、青年期の自己中心性のために異質拒否傾向が被異質視不安を生じさせているとしているが、本研究では被異質視不安と異質拒否傾向は大学生女子の友人関係において異なる影響を与えていると推測される。ここでは学年差や女子のみの生活環境ということについて検討しなかったため、今後の研究において考慮していきたい。

### 2. おそろい行動とおそろい感情における関連性

3場面におけるおそろい行動の有無について検討した結果、日常場面及び旅行場面におけるおそろい行動あり群はおそろい行動なし群よりも有意におそろい感情が高いことが示された。一方、部活・サークル場面におけるおそろい行動の有無においては、

有意差はみられなかった。この結果より、部活・サークル場面で友人と何かをおそろいにするということは、他の2場面でおそろいにするとは意味合いが異なると推測される。想定された友だち（親友でなくてもよい）は、おそろい（部活・サークル場面）では他の2場面と異なり友だちや親友ではなく、“仲間”としての友だちと捉えていることが考えられるためである。池田ら（2013）は、（難波，2005）の仲間は友だちと親友に比べ“目的・行動の共有”が顕著のみられるという指摘をふまえ、友だちとの親密度の違いによって異なる共有様式が現れるとしていることから支持される。

また、異質拒否傾向得点の高低で群分けを行い、各因子についてt検定を行った。その結果、異質拒否傾向の高群は低群よりも有意に被異質視不安が高い結果となり、先行研究を支持する結果が得られた。またおそろい感情と有意な傾向がみられた。本研究で用いたおそろい感情尺度は項目数が十分なものでなく、本来予想していたよりも社交性・一般性の高い内容の尺度となったことが考えられる。その一方で、異質拒否傾向は自分の所属しているグループとは異なる異質なものを拒否する心性ではなく、自分とは異なる存在自体を異質なものとして拒否する心性ととらえることもできる。

度数分布をみると、旅行場面におけるおそろい行動において高い数値が得られている。また自由記述では、モバイル・ファッション・アクセサリに分類されるものが多かった。特にファッションに分類された中でも、ライブやテーマパークといった遠出や非日常性を連想させるものが多かった。このことから、おそろい行動は日常的に行われるよりも非日常的に行われる傾向にあると考えられる。その一方で、SNSアカウントのアイコンやピアス・ブレスレットといった日常のおそろい行動もあった。本研究では日常のおそろい行動と非日常のおそろい行動の差異について検討しなかったため、今後の課題としたい。また研究の冒頭でも述べたようにSNSにおそろいにした服装の写真を投稿することや、本研究の自由記述欄にてSNSのアイコンをおそろいにするといった回答が得られたことから、SNSとおそろい行動の関連性についても検討する意義が

あると考える。特に現代ではSNSは簡単かつ気軽に自己表現できるツールである。そのSNSに投稿することで友人らとの結束感や他の友人らとは違うことを主張できる異質拒否傾向や、また自分もグループの一員であると確認することのできる被異質視不安が関連しているのではないかと推測される。

### 3. 自尊感情、被異質視不安、異質拒否傾向及びおそろい感情における関連性

おそろい感情を規定する諸要因の関係を明らかにするために、仮説モデルについてパス解析を行った。自尊感情から被異質視不安に負の相関が、被異質視不安からおそろい感情に有意なパス係数が得られ、異質拒否傾向からおそろい感情でも有意なパス係数があるという結果が得られた。また自尊感情や被異質視不安とおそろい感情との関連が支持された。しかし、自尊感情や被異質視不安とおそろい行動に直接的な関連があるという結果は得られなかった。またおそろい行動とおそろい感情の間にも関連があるという結果は得られなかった。したがって本研究の仮説を部分的に支持する結果が得られた。おそろい感情得点の平均値が高いことから、本研究の対象者はおそろい感情が高い傾向にあるといえるが、実際のおそろい行動には異なって影響していると考えられる。

自己認識と流行志向に関する研究を行った小松(2005)は、東洋文化で優勢な「相互協調的自己観(人間関係や、そこにある関連性の中で意味づけられている自分の属性による定義)」が製品スタイルの選択においても共通性を求めることを指摘している。また小松(2005)は、自尊感情が高いほど他者との関係や役割に過度に依存せず、自己概念の基盤を別途の観点で有しているとしている。これを本研究の結果が支持している。また、他者選択における特性自尊感情の影響に関する研究を行った柳澤ら(2010)は、(Lear & Baunmeister, 2000)が高自尊心者は一般的に他者から受け入れられているという指摘を受け、高自尊心者は積極的に相互作用を行うことができるとしている。一方で低自尊心者は一般的に他者から受け入れられているという感覚を得にくく、積極的に相互作用を行わないとしている(柳

澤ら, 2010)。このことから自尊感情が低い者は、友人関係においても受け入れられていないという感覚を抱きやすいことが推測される。(黒田ら, 2004)は大学生の友人関係において直接的に自己の評価を高揚させるのではなく親密な関係性の評価を高揚させることで間接的に自己の評価を高めているとしている。したがって、低自尊心者は他者から受け入れられている感覚を得にくく、他者との関係や役割に依存しやすく、おそろい行動に対して肯定的であることが考えられる。また友人関係において、友人との親密さをおそろい行動によって確認することで、間接的に自己の評価を高めようとしていることが推測される。

### 4. まとめ及び今後の課題

自尊感情が高いほど被異質視不安は低くなるという結果が得られた。また、被異質視不安及び自尊感情とおそろい感情の関連が支持された。おそろい行動は被異質視不安の高いものにとって、友人と一緒にであるという安心感を与えることができるのではないかと推測される。本研究では、おそろい行動が友人関係へどのように影響しているかについては検討しなかったが、「旅先で同じ服を着ることでより楽しくなる」ような楽しさの増大や「同じ服にすることで縛られる気がする」のような負担感の増大などおそろい行動には様々な機能があるのではないかと考えられる。池田ら(2013)では、「物品の共有」は友人関係の満足度を低減させるとしている。一方で本研究ではおそろい行動をとることに肯定的な傾向が得られた。だが仲間集団への同調性と心理的な密接さが必ずしも一致しないこと(上野ら, 1994)や、学校生活で仲間への親密さ・同調性の欲求や、異質性の欲求をもっているほどストレスが高いこと(黒沢, 2005)が報告されている。したがっておそろい行動が同調性圧力のようなネガティブな心理的機能も有していることが考えられる。これは池田ら(2010)においても、共有がポジティブ及びネガティブな機能を持つとして述べられていることから支持される。今後は本研究で推測されたおそろい行動の機能や、おそろい行動による友人関係の適応について検討したい。

また本研究では大学生女子を対象に調査を行った。ここで扱った被異質視不安及び異質拒否傾向(高坂, 2010)や, 女子の友人関係の難しさは中学生や高校生を中心に報告されている(上野ら, 1994; 佐藤, 1995; 黒沢, 2005)。したがって中学生や高校生を対象に今後検討したい。

## 引用文献

- 土井隆義(2008) 友だち地獄―「空気を読む」世代のサイバ  
イバル 筑摩書房
- 遠藤辰雄, 蘭千壽, 井上祥治(1992) セルフ・エスティーム  
の心理学―自己価値の探求― ナカニシヤ出版
- 榎本純子(2003) 青年期の友人関係の発達の变化―友人関  
係における活動・感情・欲求と適応― 風間書房
- 保坂享・岡本達也(1986) キャンパス・エンカウンター・  
グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究  
4 (1), 17-26
- 保坂享(1998) 児童期・思春期の発達 下村晴彦(編) 教  
育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会  
pp.103-123
- 池田幸恭・葉山大地・高坂康雅・佐藤有耕(2013) 大学内の  
友人関係における親密さと共有様式との関係 青年心理学  
研究 24, 111-124
- 石本雄真・久川真帆・上長然・則定百合子・日湯淳子・森口  
竜平(2009) 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適  
応学校適応との関連 発達心理学研究 20 (2), 125-133
- コトバンク 双子コーデ  
<<https://kotobank.jp/word/%E5%8F%8C%E5%AD%90%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%87-1712331>>(2015年12月14日)
- 管佐和子(1975) Self-Esteemと対他者関係に関する一研究  
―青年期を対象として― 教育心理学研究 23 (4), 224-  
229
- 小松亜紀子(2005) 自己認識が流行志向に及ぼす影響―製  
品スタイル選択における「自分らしさ」の判断基準とトレ  
ンドの関連 デザイン研究 52 (5), 21-26
- 高坂康雅(2010) 青年期の友人関係における被異質視不安  
と異質拒否傾向―青年期における変化と友人関係満足度と  
の関連― 教育心理学研究 58, 338-347
- 高坂康雅・池田幸恭・葉山大地・佐藤有耕(2010) 中学生  
の友人関係における共有している対象と心理的機能との関  
連 青年心理学研究 22, 1-16
- 近藤卓(2010) 自尊感情と共有体験の心理学―理論・測  
定・実践― 金子書房

- 黒沢幸子・有本和晃・森俊夫(2005) 女子中学生の仲間関  
係のプロフィールとストレスとの関連について 目白大学  
心理学研究 1, 13-21
- 黒田祐二, 有年恵一, 桜井茂男(2004) 大学生の親友関係に  
おける関係性高揚と精神的健康との関連―相互協調的―相  
互独立的自己観を踏まえた検討― 教育心理学研究52,  
24-32
- Leary, M.R. (2005). Varieties of interpersonal rejection. In K. D.  
Williams, J. P. Forgas, W. von Hippel (Eds.), *The social  
outcast: ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. Vol.  
3, pp.33-51. NY: Psychology Press.
- 益子洋人(2008) 青年期の対人関係における過剰敵意と,  
性格傾向, 見捨てられ不安, 承認欲求との関連 カウンセ  
リング研究 41, 151-160
- 松崎友世, 本間道子(2003) 内集団びいきにおける認知的・  
動機的方法としての黒い羊効果 社会心理学研究 18 (3)  
180-191
- 中間玲子, 小塩真司(2007) 自尊感情の変動性における日  
常の出来事と自己の問題 福島大学研究年報 3, 1-10
- 永沢幸七(1969) 女子学生のinformal groupの発生要因につ  
いて(その1)―YG性格検査を中心手続として―東京家政  
学院大学紀要 9, 17-27
- 難波久美子(2005) 青年期にとって仲間とは何か―対人関  
係における位置づけと友だち・親友との比較から― 発達  
心理学研究 16, 276-285
- 大平健(1995) やさしさの精神病理 岩波書房
- 尾関美喜(2011) 過剰敵意と集団アイデンティティとの関  
連 対人社会心理学研究11, 65-71
- 佐藤有耕・落合良行(1993) 女子高校生のグループの成員  
数と友人とのつきあい方の関係 筑波大学心理学研究  
15, 185-193
- 佐藤有耕(1995) 高校生女子が学校生活においてグループに  
所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要 3  
(1), 11-20
- 千石保(2005) 日本の女子中高生 日本放送出版会
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護(1994) 青年期の  
交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究  
42, 21-28
- 渡辺匠(2014) 自己と内集団の連合が自己防衛に果たす機能  
東京大学 <<http://hdl.handle.net/2261/57660>> (2015年12  
月5日)
- 柳澤那昭, 西村太志, 浦光博(2010) 低自尊心者は身近な  
人しか選べないのか―他者選択に 特性自尊感情及び相互  
作用の質が及ぼす影響― 実験社会心理学 50 (1), 89-  
102